

石原美奈子（編）『愛と共生のイスラーム——現代エチオピアのスーフィズムと聖者崇拜』

■ 出版地：横浜 ■ 出版社：春風社 ■ 出版年：2021年 ■ 総頁数：550頁 ■ 定価：6300円＋税

赤堀 雅幸*

本書はエチオピアを舞台に、同国では宗教的少数派であるムスリムたちについて、長期間にわたり精力的に調査を行っている人類学者、石原美奈子を編者とする、一人のスーフィー聖者、アフマド・ウマルへの崇敬に関する大部の研究である¹。

本書を正當に評価するには人類学の専門家であるだけでなく、エチオピアに詳しく、スーフィズムの全般についても高い見識がある者が望ましい。そのように考えると、エジプト他の中東地域でスーフィーではない聖者についての崇敬の人類学を研究してきた評者では力不足の観はあるが、評者がこの四半世紀ほど、スーフィズムと聖者崇敬との関係について共同研究を推進してきたことから、若干は述べることもあるだろうと考え、この書評を書くこととした。

石原の手になる編著としては『せめぎ合う宗教と国家』、『現代エチオピアの女たち』（石原（編）2014; 2017）に次ぐ3冊目であり、そのなかでは本書は石原の研究の中心的な主題を直接に扱った1冊である。著者の博士論文（石原 2009）をもとにしているが、その一方で、第9章と第10章には、別の著者（松波康男と吉田早悠里）の手になる論考が組み込まれ、結果として石原の単著ではなく編著になるという、いっぷう変わった組み立てになっている。

本書は4部構成で、第1部はアフマド・ウマルの登場に先立つ時代を扱った前史、第2部は彼の存命中の活動、第3部は死後の崇敬の様子、第4部はさらに後、2010年代以降の状況について扱っている。

序章

第1部 西部オロモ社会とイスラーム

第1章 オロモの社会と宗教

第2章 ジンマ地方のイスラーム化——「商人」と学者

第2部 カリスマの誕生——アルファキー・アフマド・ウマルの人生誌

第3章 聖者性の醸成——西アフリカからエチオピアへ

第4章 聖者性の発現——ミンコ村からクサイエ村へ

第5章 聖者性の存続に向けて

第3部 カリスマの日常化：ティジャーニー教団の「土着化」

第6章 聖者と精霊——イスラーム化と霊媒師の役割

第7章 ティジャーニー教団の展開と「イスラーム化」

第8章 「聖性」の政治学——ヤア聖者廟村の形成と変容

第4部 「カリスマ」を取り巻く社会環境の変容

第9章 ヤアの今日的状況——土地取引と民族対立の最中で（松波康男）

第10章 引き継がれるアルファキーの「仕事」——トリ集落とアブドゥルカリーム（吉田早悠里）

終章

* 上智大学

¹ 本書では一貫して「聖者崇拜」の用語が用いられているが、神に対して用いられる「崇拜」とは区別して、「聖者崇敬」、「聖者信仰」を用いることが近年ではふえており（e.g. 菊田 2013; 東長 2013）、ここでは「崇敬」を用いる。

上記以外に、冒頭に数葉の写真、目次、地図、凡例、プロローグ、謝辞、末尾にエピローグ、インフォーマント一覧、参考文献、索引を配している。また、各部、各章の最初に章にも節にも属さない文章が付いている場合がある。

以下、各章の内容を簡単に紹介していく。

序章は、エチオピア近代史概説、エチオピアのイスラームに関する先行研究紹介、エチオピアのスーフィズムと聖者信仰概説、ティジャーニーヤ概説²、イスラームの聖者崇敬先行研究紹介と研究目的の説明からなる。

第1部は2章構成、第1章が、オロモの人々が拡散と同化の歴史をたどりつつ、本書の舞台となるエチオピア南部から西部にかけての地域で多数派を占めるようになった過程と、伝統的政治権力の確立、イスラーム以前の信仰のありように触れ、それらをアフマド・ウマルに対する崇敬の下地となる状況と位置づけている。第2章は、アフマド・ウマルの崇敬者たちの多くが暮らすジンマ地方に、18～19世紀に五つの王国が成立してイスラームが普及し、エチオピア帝国への編入によって政治的自律性を喪失する一方で、イスラーム的知について広域のネットワークへの接続がなり、アフマド・ウマルの登場に先行してティジャーニーヤが同地に導入された過程について述べる。

第2部は3章立てで、第3章は19世紀末にナイジェリアで生まれたアフマド・ウマルの生い立ちからエチオピア定着の過程を語る。幼いときから宗教諸学を学び、神秘家としての修行に力を入れ、やがてメッカに巡礼して、その帰路、自らが生涯を過ごすべき運命の場所を得るというのは、多くのスーフィー聖者に共通した人生の展開であり、これをアフマド・ウマルもたどり、エチオピア南部にいたる。当初、彼はオロモの人々に頼りにされる著名な人物ではあったが、聖者とは認められていなかったと石原は述べる (p. 224)。続く第4章は、ミンコ村に居を移して、いよいよ聖者だと広く認知され、村が参詣地となって人々が参集するようになった様子を描く。さらに、イタリアの植民地支配期 (1936–1941) にも、仲介者として植民地支配勢力から人々を守っているとの見方があって、その声望はますます高まったという。しかし、植民地支配からの解放後、クサイエという別の村に移ったアフマ

ド・ウマルは、はっきりとはわからない理由によって隠遁の生活に入り、石原はこれを『『聖者性』の留保』と呼ぶ (p. 268)。第5章は、アフアッロ村に移住して、アフマド・ウマルが隠遁の暮らしから脱し、再び多くの崇敬者を集めるとともに、周辺でたくさんの土地を手に入れて修道場や関連施設を建て、この地方のティジャーニーヤの活動をこれまでになく隆盛に導いたことを記す。後半では、1951年にメッカへの再巡礼に赴き、帰途、スーダン国境に近いヤアの地で1953年に亡くなった経緯が、数々の奇蹟譚とともに示される。

アフマド・ウマル亡き後を論じる第3部は3章からなる。第6章は聖者の死後、精霊を憑依させて語る霊媒師たちが登場し、亡くなった聖者と人々を繋ぐ役割を果たしたことについて述べる。第7章は、聖者の活動を死後に継続させた存在として、ジンマ地方のティジャーニーヤの他の導師たち、アフマド・ウマルの子孫たち、そして「サグラ」と呼ばれる、とくに熱心な崇敬者たちの存在を紹介した後、社会主義を標榜するデルグ政権 (1974–1987) とその後のイスラーム主義の浸透によって、崇敬に陰りが見られるようになったと指摘する。第8章は、アフマド・ウマル死没の地であるヤアに聖者廟が築かれ、村が建設されて、参詣地としておおいに栄えただけでなく、財産の私有を制限し主な生産手段を共有した特異な共同体が形成されたと述べた後、デルグ政権下で社会主義的施策が全国に導入されたことに加え、この地域が反政府勢力との紛争の舞台となったことから、ヤアへの参詣も共同体の性質も変容していったと語る。

第4部は石原以外の二人の著者の論考をそれぞれ1本収めている。松波の手になる第9章は第8章に呼応し、ヤア聖者廟村の歴史を、1970年代デルグ政権期の苦難から80年代の民族紛争の影響、さらに90年代にエチオピア人民革命民主戦線が政権を掌握して以降の展開へと追い、同政権下での参詣地としての復活から宗教観光の展開、周辺での資源開発の影響、そして近年の民族対立のなかでもヤアにオロモが留まっている状況までを順に説明する。第10章では吉田が、第7章の続編として、トリという集落に居を構えるアフマド・ウマルの息子、アブドゥルカリームについて、父の仕事を継承する者と位置づけ、イスラームとキリスト教にまたがって人々を引きつけるその活動につい

² 本書では「ティジャーニー教団」と記されているが、クリーカが「教団」と呼びうるかが近年では議論されており (濱田 1994: 260)、ここでは「ティジャーニーヤ」とする。

て記す。

終章は、40ページあまりの序章に比べると7ページとやや収まりが悪いが、全体の簡潔なまとめになっている。

以上の短い紹介からも、聖者アフマド・ウマルの生涯と彼の活動の継承について、総合的多面的に議論が展開されていることがわかる。そして、その著述を支えているのが、長年にわたり丁寧に実施された調査である。目にみえる成果を早く数多く出すことが求められがちな今日の学術の状況において、丹念に息長く調査を継続し情報を蓄積してきたその姿勢は真に敬意を払うに値する。

加えて、スーフィー聖者を扱った民族誌であるという特徴も重要である。人類学者がイスラームの聖者を主題に据えて日本語で記した著作としては、鷹木(2000)のものがよく知られているが、そこで研究の対象となっている聖者はスーフィーとは限らない。菊田(2013)の民族誌で崇敬の対象となっているバハーウッディーン・ナクシュバンドは、誰もが知る著名なスーフィーであるが、彼のスーフィーとしての側面はこの著作では大きく取り上げられてはいない。日本語以外の人類学の著作に目を向ければ、イスラームの聖者崇敬についての論考は数多いが、スーフィー聖者のスーフィーとしての側面を重視した研究は不思議なほどに少ない。スーフィズムに関する人類学の研究として広く読まれている著作としては、ギルズナンやクラパンザーノの著書が挙げられるもの(Crapanzano 1973; Gilson 1973)、それらは組織としてのタリーカに主に関心を払っており、開祖たるスーフィー聖者に焦点を当ててはいない。これは実は無理からぬ側面もあり、著名なスーフィー聖者は多くが自身で著作を残しており、またムスリムの学者たちが多数の聖者伝を残しているため、それらの著作を用いた伝記的な研究は、事実としての生涯であれ、人々に語られる数々の奇蹟に彩られた生涯であれ、思想研究や歴史学の研究者たちが手厚く行っており、人類学には今生きている人々の崇敬のありようの研究という以上には踏み込みにくい領域になっているのである。

これに対して、本書が対象とするアフマド・ウマルは自身の著作を残しておらず(伝記については2冊があり、本書の第3章と第4章他でたびたび参照されている)、トリミンガムによるタリーカについての古典的著作(Trimingham 1998 [1971])や、その後に刊行され、地域別のタリーカの状態を扱った代表的な論集

(e.g. Nasr [ed.] 1991; Popovic and Veinstein [eds.] 1996)などにその名をみない。西アフリカに比して、東アフリカのスーフィズムについての研究が全般に乏しいという事情を差し引いても、アフマド・ウマルは思想研究者や歴史家たちには手が出しにくい、文書記録の乏しい人物である。そうした地域的なスーフィー聖者もまた篤く崇敬され、人々の日常のイスラームを支えていたのを知るという意味で、人類学者である石原らの仕事には価値がある。ちなみに、セネガルを舞台に漁民集団と結合した地域的なタリーカの活動を描いた盛(2012)の民族誌も、この点で本書と並べて読むことができるだろう。

さらに、スーフィー聖者に対する崇敬が、歴史のなかで様々な逆風にさらされながら、暴力的な対応に走ることなく、今日まで存続している点に本書が目しているのも特徴的である。崇敬は、エチオピア帝国編入後の宗教的民族的少数派であるオロモのムスリムたちを支え、また彼らに支えられ、イタリアの植民地支配下に置かれ、デルグ政権の社会主義政策に痛めつけられ、イスラーム主義の浸透による苦境にも耐え続けてきた。それが本書の題名に「愛と共生」が付された所以となっている。

こうした数々の注目すべき特徴が本書にある一方、読後、気になった点については3点を指摘したい。

まず、大部の書籍であるがために無理からぬと思われるが、細部での形式上の粗さがやや目立つ。誤植(たとえば、「アフリカ・ウマル」は正しくは「アフマド・ウマル」、p. 261)、アラビア語のカナ転写、ラテン文字転写の不統一や誤り(ヒジュラ暦月名の定冠詞を仮名書きするか否か、定冠詞の後にダブルハイフンを入れるか否かの二重の不統一が一つの見開きページ中にある。pp. 208-209)、民俗語彙の説明が初出時に付されていない例(「マアド」はp. 334が初出と思われるが、その後、何ら説明なく繰り返し言及され、p. 352で初めてその意味が説明される)、スーフィズムの用語の訳の適切といいがたい例(*fikr*を「叡知」としているが、「叡知」は一般的には*hikma*の訳語で、*fikr*は「瞑想」。p. 175)などは、つまらないことのようにいて、読者の読みやすさに大きく関わり、内容が充実しているだけに残念に思われる。

第2は人類学の理論の適用に関する問題である。本書では、アフマド・ウマルの事績を了解するのに、よく知られた人類学の理論がしばしば言及されているが、そのいくつかについては、理論が本来意図してい

たところからずれが生じており、適用の妥当性に疑問が残る。

たとえば、第4章で石原は「アフマド・ウマルは、軍事的・政治的には優位な立場にあるイタリア軍に対して象徴的なレベルで優位に立ち、場合によってはユブドの件に見られるように、意志決定の過程においても影響力を担保しようとしたのである。このような関係はサーリンズの『否定的互酬性』に相当するといえる」と述べている (p. 262)。しかし、『石器時代の経済学』でサーリンズ (1984 [1972]: 241) は「他の男の財ないしその妻の横領は、共同体の身内同志では罪(《盗み》、《姦通》)であるが、部外者にたいしておこなわれたばあいには、大目にみられるばかりか、仲間にはほめそやされて、褒賞をうけることは間違いない」という例示を行っている。「否定的互酬性」とは奪って返さない関係であって³、石原のいうアフマド・ウマルとイタリア軍との関係には明らかに当てはまらない。

同様に、第8章では「日常化される『コムニタス』」の題名で、ターナーのいうコムニタスがヤア聖者廟村では日常的に実現したと石原は述べるが⁴、ターナー (2020 [1969]: 155) は「個人や集団にとって社会生活は、高い地位と低い地位、コムニタスと構造、同質性と区別、平等と不平等を連続的に経験することを含むひとつの弁証法的過程である」と述べており、ファン・ヘネップ以来の儀礼の構造論を踏まえて、コムニタスは非日常に属し、恒常化しないとされている。これを日常化すると論じることは、理論自体にとって明らかに矛盾である。さらに、第8章を含む第3部を「カリスマの日常化」と題しているが、この用語はヴェーバーが「支配の諸類型」において論じたところでは、カリスマ的支配が長期化することによって合法的支配もしくは伝統的支配に近似することを指しており (ヴェーバー 1970 [1956]: 80-81)、これを用いると、本書におけるアフマド・ウマルと崇敬者たちの関係が支配被支配に収斂することになってしまう。

こうした理論のずらしとも関連しているのが指摘の

第3点で、それは同じく第8章で取り上げられる (p. 410)、イードとソルナウの編著『聖性を論議する』⁵の序論をめぐる議論と関わっている (Eade and Sallnow 2000)。石原は、その序論から引いて「聖地は多種多様な意味や実践を受容する儀礼的空間あるいは『宗教的空所』の性格を備えており、その『容器』のなかに参詣者は一方的に希望や祈願を注ぎ込むことができ」ることに着目し、さらに「多様な言説を注ぎ込む参詣者と一定の『公式』言説のなかにそれを押し込めようとする聖地管理者の間の言説の拮抗に注目」する視点を活かして、ヤア聖者廟村で起こった意見の対立について論じている (pp. 437-439)。この石原の理解には何ら異論はない。

しかし、翻って本書の全体が、イードとサルナウの述べる多種多様な意味づけと実践が入り交じる場、言い換えればアサド (Asad 1986: 14-17) のいう言説的伝統が競合する微視的な状況として崇敬の場を描き出しているかといえば、私には疑問に思われる。聖者への崇敬をめぐる人々の考えや行動には、当然のように衝突も葛藤もあるし、それは聖者自身の内面にも存在するであろう。本書を通読しても、クサイエ村での隠遁をめぐるアフマド・ウマル自身の行動とそれに対する周囲の解釈 (p. 269) や、ヤアでの死去をめぐる崇敬者たちの発言と行動 (pp. 304-306) に、そうした不調和を嗅ぎ取ることができる。だが本書では、そうした共生に反する事例については、言及はしても大きく取り上げることはなく、ことごとくが挿話として扱われ、全体の予定調和を乱さないようになっている印象がぬぐえない。

オロモという民族の形成過程をめぐっても、第1章では被征服民が同化過程の暴力性を記憶していることに触れながら (p. 78)、エピローグでは「オロモは、被征服民を『オロモ化』することで共生社会を作り出した」とし、「他者を否定し、他者と対立するからではなく、異質な他者を受け入れ、同化する文化的要素を備えている」という、多元主義とはほど遠い議論に着地させてしまっている (p. 506)。

3 石原の用いる「互酬性」の方が一般的だが、邦訳では「相互性」の語が用いられている。

4 英語としては「コムニタス」となるが、邦訳ではラテン語発音の「コムニタス」が使われ、全般には両表記が拮抗している印象である。本書評では「コムニタス」とした。

5 石原は「聖性を論議する」と訳しているが、「論議」と訳された contest は、巡礼者たちが聖遺物などの聖性に疑いの目を向けること、またキリスト教の巡礼に関する著名な論集でターナーら (Turner and Turner [eds.] 1978) が用いた聖性の概念を、新たな論集として再吟味することを指している (Eade and Sallnow 2000: 10-11)。このため本書評では「聖性を論議する」と訳した。所収の各論文では、巡礼者間で聖性に対する異なる見解がせめぎあうことも注目されており、「聖性を競い合う」といった訳もありえるかと考える。

スーフイズムが全般として、政治的なイスラームとは異なる可能性、おそらくは共生する多元的社会に親和的な信仰と実践を実現する可能性を有していることは、評者自身も認めるところだが、だからといってスーフイズムが常に平和的な性質を備えてきたわけではなく、それは石原自身も認めている(p. 58)。だがそれを、同じ箇所ですべて石原が言っているように、ムスリムが多数派であったためだとしてしまえば、結局、石原のいう「愛と共生のイスラーム」が生まれたのは、少数派であるがゆえに社会変革の推進母体になりえなかったからだという結論が導かれてしまう。スーフイズムの平和的な性質を自明として描き出すのは、スーフイズムの実践者、とりわけ欧米に門徒を獲得しつつあるスーフィーたちの著作に広く見られ(e.g. ベントウネス 2007 [1996])、またオリエンタリズムの伝統に則った研究者たちの著作にはこれに呼応する主張がしばしばみられる⁶。人類学者はそれを自明とせず、対立や迷いを経て共生の道を模索するスーフィーたち(もちろんスーフィーでない者たちも)を描くという別の道を行くべきであろう。

この点に関して言えば、私自身が聖者の聖性をそのままに受けとめるには素直でないだけかもしれないが、本書は私には一人のスーフィー聖者をあくまでも聖者として描き出した著作にみえてしまうのである。

謝辞

本書評の執筆にあたり、タリーカー一般における入門免状(イジャーザ・アル=イラーダ)とハイララ(「唯一神の他に神はなし」と唱えること)の朗唱作法について、東長靖氏(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)にご教示賜った。御礼申し上げます。

参考文献

(日本語文献)

石原 美奈子

2009 「エチオピアのムスリム聖者崇拜——ティジャーニー導師アルファキー・アフマド・ウマルと西部オロモ社会」東京大学提出博士論文。

石原 美奈子(編)

2014 『せめぎあう宗教と国家——エチオピア 神々の相克と共生』風響社。

2017 『現代エチオピアの女たち——社会変化とジェンダーをめぐる民族誌』明石書店。

ウェーバー、マックス

1970 『支配の諸類型』世良晃志郎(訳)、創文社(Max Weber 1956 *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriss der verstehenden Soziologie*. 4, neu herausgegeben Aufl., besorgt von Johannes Winckelmann. Tübingen: Mohr, 第3章、第4章の部分訳)。

菊田 悠

2013 『ウズベキスタンの聖者崇敬——陶器の町とポスト・ソヴィエト時代のイスラーム』風響社。

サーリンズ、マーシャル

1984 『石器時代の経済学』山内昶(訳)、法政大学出版局(Marshall Sahlins 1972 *Stone Age Economics*. London: Routledge)。

ターナー、ヴィクター・W

2020 『儀礼の過程』富倉光雄(訳)、筑摩書房(Victor W. Turner 1969 *The Ritual Process: Structure and Anti-structure*. London: Routledge & K. Paul)。

鷹木 恵子

2000 『北アフリカのイスラーム聖者信仰——チュニジア・セダダ村の歴史民族誌』刀水書房。

東長 靖

2002 「スーフイズムの分析枠組」『アジア・アフリカ地域研究』2: 173-192。

2013 『イスラームとスーフイズム——神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会。

ベントウネス、シャイフ・ハーレド

2007 『スーフイズム——イスラムの心』中村廣治郎(訳)、岩波書店(Cheikh Khaled Bentounès 1996 *Le soufisme, cœur de l'Islam: suivi d'extraits du Diwan du Cheikh Ahmed Ben Mustapha Al-Alawi, entretiens avec Bruno et Romana Solt, Paris: Table Ronde*)。

濱田 正美

1994 「スーフィー教団——宗教権威から政治権力へ」後藤明(編)『文明としてのイスラーム』pp. 257-284、栄光教育文化研究所。

盛 恵子

2012 『セネガル・漁民レブーの宗教民族誌——スーフィー教団ライエンの千年王国運動』明石書店。

(英語文献)

Asad Talal

1986 *The Idea of An Anthropology of Islam*. Washington D.C.: Center for Contemporary Arab Studies, Georgetown University.

Crapanzano, Vincent

1973 *The Hamadsha: A Study in Moroccan Ethnopsychia-*

⁶ なお、かつてのオリエンタリストには、東長(2002: 184)が指摘するように、スーフイズムを外来の伝統としてイスラームから切り離し、平和的思想として称揚する傾向があった。これに対し、今日のスーフイズム擁護者は、スーフイズムをイスラームの本道として、平和的だと評価するという論理を展開する。

- try. Berkeley: University of California Press.
- Eade, John and Michael J. Sallnow
2000 Introduction. In *Contesting the Sacred: The Anthropology of Christian Pilgrimage*. John Eade and Michael J. Sallnow (eds.), pp. 1–29. Urbana: University of Illinois Press.
- Gilsenan, Michael
1973 *Saint and Sufi in Modern Egypt: An Essay in the Sociology of Religion*. Oxford: Clarendon Press.
- Nasr, Seyyed Hossein (ed.)
1991 *Islamic Spirituality II: Manifestations*. Chestnut Ridge,

- NY: Crossroad.
- Popovic, Alexandre and Gilles Veinstein (eds.)
1996 *Les voies d'Allah: les ordres mystiques dans le monde musulman des origines à aujourd'hui*. Paris: Fayard.
- Turner, Victor and Edith Turner (eds.)
1978 *Image and Pilgrimage in Christian Culture: Anthropological Perspectives*. Oxford: Basil Blackwell.
- Trimingham, J. Spencer
1998 [1971] *The Sufi Orders in Islam*. Oxford: Oxford University Press.